2019年度名古屋学芸大学健康・栄養研究所　研究・実践報告

■研究・実践の課題（テーマ）

大学生の歯科口腔保健行動への大学教育と過去の教育・経験の影響について

■主任研究者　浅野妙子

■共同研究者　松下英二、橋口桂子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

目的

成人期の歯（永久歯）の損失は将来の健康のみならずQOLの低下に関与し、大学生への歯科口腔保健教育は早期予防の観点からも重要である。本研究は大学教育および過去の歯科口腔保健教育と、大学生における歯科口腔保健行動の現状を明らかにするとともに、各教育課程間で比較することで教育課程間の差を明らかにすることを目的とした。

方法

N大学の各教育課程（管理栄養士、看護師、芸術系、養護教諭、保育士）に在籍する女子大生440名を対象とし、口腔清掃行動、歯科受診・受療行動、審美性について学習状況を現在の行動に関するアンケート調査を実施した。

結果

口腔清掃行動を学習した者の割合は、養護教諭（73.2%）および保育士（64.3%）が高く、歯科受診・受療行動については養護教諭（58.9%）が他の教育課程よりも有意に高かった。歯科口腔保健行動では、看護師の歯磨き回数が2.3回と最も多く、歯磨きの際に工夫をしている者の割合は養護教諭で64.3%と有意に高い割合であった。養護教諭において歯磨きの際の工夫は学内の「演習・実験・実習」で口腔清掃行動を学習していたことと有意な関連が見られた（P=0.018）。

結論

学習した者の割合は、口腔清掃行動については養護教諭および保育士、歯科受診・受療行動については養護教諭で高い結果が得られた。歯科口腔保健行動では看護師で歯磨き回数が多く、養護教諭で歯磨きの際の工夫する者の割合が高い結果が得られた。歯磨きの際の工夫は、講義よりも演習・実験・実習での学習が関係していることが明らかになった。